

埋文よこはま 4



財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成 13 年 9 月 30 日発行

み の わ ど う や と 箕輪洞谷に古代のお墓発見

遺跡の発見

平成13年2月、港北区箕輪町三丁目で横浜市緑政局が進めている、公園づくりにともなう急斜面の防災工事が行われていました。工事現場を見せていただいたところ、その区域内に少なくとも5つのお墓（横穴墓）があることが確かめられました。ここは、遺跡の存在が知られていない場所でした。こうして、発掘調査をするための相談と準備が始められたのです。それは工事中に発見されたため、大急ぎで進める必要がありました。翌3月、調査のために舞台のような足場を組み立て、まだ肌寒い季節の中で発掘調査が開始されました。

お墓のある場所と

お墓の名前

このお墓は、港北区箕輪町三丁目416番地にあります。そこは東急東横線日吉駅の南南西およそ340mの位置にあたります。標高35mほどの通称「日吉台」と呼ばれる台地が南に張り出す先端部の急斜面で、南東に面しています。ほんの少しの間ですが、東急東横線の車窓から西側に現地を見ることができます。このお墓の南側には建物が建ち並ぶ沖積地が広がり、その向こうに綱島や大倉山の丘陵を望むことができます。

このお墓が営まれていた頃、名前があったかどうかは判りません。ここでは遺跡としての名前についてふれておきます。はじめ「箕輪横穴墓群」としましたが、調査も一段落した頃、この地域に永くお住まいの方から、このあたりが



東側の横穴墓群と出土須恵器



遺跡の場所

「洞谷」と呼ばれていることを教えていただきました。このお墓のある場所をより詳しく示すことができる上、地域に伝わる地名を加えることができるため、「箕輪洞谷横穴墓群」と名付けることにしました。遺跡の名前は、ふつう地名によって付けますが、ひとつの地名の範囲にいくつもの遺跡があったり、場所を限定できる地名が

判らなかつたりする場合があります。遺跡の名前を付けるのも大変です。「洞谷」は地図に記載されている地名ではありませんが、この地域に古くから伝えられている地名です。その名前からすると、昔のお墓として知られていたかどうかは別として、この横穴墓群が地名の由来にかかわっているものと考えられ、その存在は古くから知られていたと言えます。

お墓の分布

さて、調査の結果、9つの横穴墓が発掘されました。うち1つは大きく崩れ、大量の土砂におおわれて危険な状態にあったので、手前を少し発掘して確かめるだけにとどめました。

調査した場所の東側のはずれと西側のはずれには、丘陵の稜線があります。上から見た分布（水平分布）では東側の稜線から中央部にかけての範囲に8つ、西側稜線付近に1つがあり、大きく二つのグループに分けることができます。正面から見た分布（垂直分布）では、口を開けている部分の床面の標高がおよそ6mにあるもの、9mにあるもの、11m前後にあるもの、14m付近にあるものの四つのグループ



横穴墓調査のようす

プに分けられます。最も低い位置にあるのは、西側稜線付近に位置する1つです。このような分布から、この1つのみは別のグループに属しているものと考えられ、本来この付近には他にいくつか存在していた可能性が考えられます。東側の稜線から中央部にかけて分布する8つは、さらにいくつかの小さなグループにわけることができそうです。

お墓の残り具合

箕輪洞谷横穴墓群では、前庭部ぜんていぶが残っている例が1つもなかったため、この部分のようすを知ることができません



横穴墓のかたち

でした。また、東側に位置する3つは亡きらを安置する玄室の奥壁の一部が残っているだけで、本来のようすがわかりませんでした。比較的残りがよかったものでも、羨道せんどうの奥部から玄門付近までしかありませんでした。閉じふさぐ施設も残されておらず、いずれも後の時代に開口した状況を示していました。東側のグループの1つには、宝永4(1707)年に富士山が噴火した時に飛んできた砂のような火山灰ほうえいかざんばい(宝永火山灰)が、厚さ10~20cmほど積もっていました。

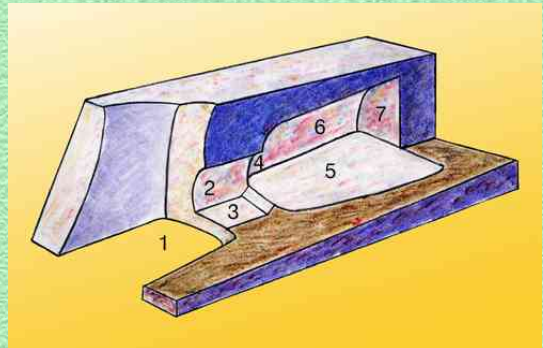


横穴内部のかたちと須恵器出土状態

横穴墓について

「横穴墓」は、古墳時代のお墓の一種で、山腹の急斜面を横に掘り削って築かれたものです。掘り削り・壁の仕上げには、少なくとも2種類の鉄の刃先をもつ道具が使われています。お墓の構造は、後期古墳の横穴式石室と同じです。亡きらを安置するための部屋(玄室)と玄室に至る通路(羨道)、さらに羨道の前面にある天井のない空間(前庭部)からなります。前庭部は「墓前域」とも呼ばれます。そして、玄室の入り口部分を玄門、羨道の入り口部分を羨門と呼び、羨門付近に岩の塊や板状に切り出した岩を用いた閉じふさぐ施設(閉塞施設)を設けます。この閉じた岩などを取り外せば、後に亡くなった人をさらに追加して葬ること(追葬)が可能です。それはまた、墓泥棒にとって侵入しやすいつくりともいえます。

九州地方では、5世紀(西暦400年代)終わり頃につくられ始めます。横浜市域では6世紀終わり頃に伝えられ、7世紀終わり頃を中心とする時期までのおよそ100年間にわたって営まれます。この種のお墓に葬られた人々は、当時の有力な家族の構成員と考えられています。数代にわたってつくり続けられた結果、いくつかの小さなグループをなして存在します。各部の形態もつくられた地域や時期によってさまざまなものがあります。



横穴墓のつくり

- 1 前庭部(ぜんていぶ) 2 羨門(せんもん)
- 3 羨道(せんどう) 4 玄門(げんもん)
- 5 玄室(げんしつ) 6 側壁(そくへき)
- 7 奥壁(おくへき)

お墓の形にみる特徴

この横穴墓群で主となる形は、玄室の奥壁の幅・高さが最大値を示し、横に切った断面は、カマボコを輪切りにしたようなアーチ形をしています。縦方向に断ち割った形は、玄室奥壁が羨道側に少し傾き、天井部は羨門に向かって直線的に下がっています。床面も羨門に向かって少しずつ下がっていますが、玄門付近で段がつけられているものが多い傾向にあります。玄室の平面は台形をしています。玄門の部分は形ばかりで、大変あいまいなようすを示しています。

これに対して、東側のグループの最も西側にある1つは、

横断面形がアーチ形をしている点は共通していますが、小形で玄室と羨道の区別がつかず、全体の平面が長方形をしている点が異なります。

亡くなった人を大切に作る行為を表すもの

死者の安住の場所であるはずの玄室内は、閉じてしまえば闇の世界です。しかし、壁画が描かれている例や天幕のようなものが張られていたことを想像させる壁面に突き刺さった鉤状の金具が残されている例などから、内部を飾る行為（むずかしい言葉ですが、「神聖化」あるいは「荘厳化」といえますか）がなされていたと考えられます。

床面に敷き詰められる河原石（敷石）も、そのような行為の一つではないでしょうか。石が敷き詰められていた例は、4つで確かめられました。いずれも一部が失われてい



床に敷き詰められた石

ましたが、ここでは残りがよかった2つのデータを紹介します。1つは、総点数481点、総重量440.96kg、1点当り平均重量916.8g、もう1つは、総点数315点、総重量465.38kg、1点当り平均重量1477gありました。いずれも本来は500kgほどの河原石が運びこまれていたと推定されます。これらの河原石はどこから、どのように運ばれて来たのでしょうか。これは想像ですが、おそらく多摩川のどこかから、馬などを使って運んだのではないかと考えられます。近くを流れる鶴見川には、河原石がありません。ゴロゴロ転がっている河原石でも、この地域の人にはムラ境を越え、相当の労力・費用をつぎ込んで手に入れたのです。

お墓が作られたのはいつか

副葬品は、装身具（耳飾り・ガラス玉など）、鉄製武器および武器に付属する金具（刀・鏃・両頭金具）、工具（刀子）が発見されました。耳飾りは、銅に金メッキしたものです。鉄製品は、永い年月の間に錆びておぼろげになっており、ほとんどのものが破片となって出土しました。両頭



墓から出た品々 鉄鍔・両頭金具・耳飾り・ガラス小玉

金具は、両端が丸くなっている棒状の鉄製品で、弓の飾り金具の一種です。このほか、葬送のまつりの際などにお神酒などを入れて供えたと想像される器が出土しています。この器は、「須恵器」と呼ばれる焼き物で、古墳時代の中頃に朝鮮半島の陶工によってその技術がもたらされました。今回出土した須恵器は、いずれも東海地方で生産されたものと推定されます。

箕輪洞谷横穴墓群がつくられた年代は、横穴墓の形や発見された遺物の特徴などから、7世紀（西暦600年代）中頃から終わり頃を中心とする時期と考えられ、50年間ほどにわたって営まれたとみられます。

現在のようす

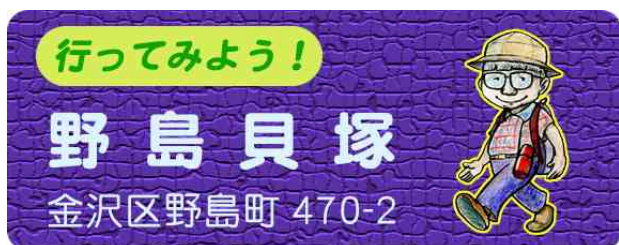
現在は、横穴墓内部を見学することはできません。これまでに、横浜市は横穴墓の主なものの位置を壁面に表示す



現在の遺跡のようす

る工事を行いました。今後、教育委員会で現地に説明板の設置を予定しています。

なお、出土品や測量図面などの記録類は埋蔵文化財センターで保管しています。



今回行ってみる野島貝塚はかつて江戸時代に金沢八景の一つ「野島の夕照」と呼ばれていた金沢の野島にあります。行き方は二通りあります。京浜急行の金沢八景駅から歩いて行くか、レジャーランドがある八景島などへ行く金沢シーサイドラインに乗り、野島公園駅で下車し、徒歩で行くかです。野島公園駅の南東側に野島を望むことができます。野島橋をわたって真直ぐ行くと野島公園管理詰所に行き当たります。そこを左に折れて駐車場の脇を道なりにすすむと、展望台への上り口に着きます。折れ曲がった道を二つ折れながら登ると展望台への二股にさしかかります。さらに左側を行くと左手に広場がひろがってきます。その右手に展望台があります。

野島はかつて独立した島でした。この標高53mをはかる山頂部ちかくの縁辺部や斜面に貝塚があることがわかったのは、戦前に砲台を築くために工事が行われて、貝が掘り



野島橋からみた野島

埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業のようすを見学できます（予約が必要です）。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所：午前9時～午後5時。土・日・祝日休み。

交通：東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

出されたからです。昭和20年代前半には多くの考古学者が来て発掘しています。

掘り出された貝はマガキが多く、ついでアサリ・オオヘビガイ・イボニシなどがやや多かったとい

います。海に棲んでいる貝からつくられている貝塚といえます。貝の中から出る土器は底が尖り、細い粘土紐で幾何学的な文様がつけられています。これらの土器はこの貝塚に因んで野島式と名付けられています。縄文時代の早期後半の頃といわれ、今からおよそ8,000年前になります。市内では最も古い貝塚です。

貝のほかに鹿の角で作られた釣針、腕にはめる貝輪の作りかけ、当時の人々が食べ物にしたシカやイルカなどの動物の骨が発見されて

います。さらに隣りの遺物を含んでいる土層からは木を切る道具である磨製石器が出ています。貝層の下だいの土層からは大丸式、夏島式など野島式よりさらに古い早期はじめの土器が

見つかっています。この貝塚は横浜の歴史を明らかにする上で学術上極めて貴重なものといえます。

展望台から東京湾や横須賀市の夏島を望みながら、かつて漁や狩をして暮らしていた縄文人の姿に思いをはせるのもよいのではないのでしょうか。

発見された遺物は神奈川県立歴史博物館・明治大学・横須賀市立人文博物館などに保管されています。



展望台への上り口



広場の北側にある説明板

*「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋文よこはま 4

発行日 2001年9月30日

編集・発行 財団法人横浜市ふるさと歴史財団

埋蔵文化財センター

〒224-0034 横浜市都筑区勝田町 760

TEL 045-593-2406

FAX 045-593-2403